

「高井」第六十五号別刷

普代遺跡発掘調査

中野市教育委員会

普代遺跡発掘調査

中野市教育委員会

はじめに

乳幼児保育の発展と拡充をめざして、中野市東山（普代）の荒井敏雄氏所有の鶏舎あとに法人の「ひよこ保育園」が移転新築されることとなり、昭和五七年四月開園をめざして五六年一月より建設工事が着手された。現地は縄文—弥生—土師の遺物散布地として確認されていたので、県文化課の指導をうけた際、表面採集では、濃厚な遺物散布が認められなかつたので「丁張り」を設定し、調査必
要個所の発見された時点で緊急発掘を実施するようとの指導をうけ、市教委の岩戸主事が工事立合いで、工事場の西北地点より堆、器台の出土を確認したので直ちにその附近の工事の中止を申し入れ、一二月一一日一一三日の三日間、寒風と雪の中を緊急発掘と記録保存をすませた。

立地と環境

普代遺跡は、中野市誌によると縄文晚期以降の遺物が発見され、下高井教育会が昭和一四年八月刊行した「下高井郡の先史時代及び歴史時代概観」（主任神田五六）によると、現在高社郷開拓団の慰靈碑の建つ平地より太形蛤刃石斧の出土を記している。遺跡の範囲



第1図 遺跡の位置

は、北は北村高圧KK社地から、南方は今回
の調査地点まで
の巾で、山腹の
緩急斜面まで続
くと想定され、
現在の普代区の
住宅地・寺地な
どが含まれ、先
史時代から現在
に至っていると思われる。立地する傾斜は一五度—二〇度、西
方に開け、調査地点で標高約三八〇m、中野扇状地面との比高は約一
〇mである。中野平をへだて、北信五岳が実際に均整のとれた姿で眺
望され、印象的である。

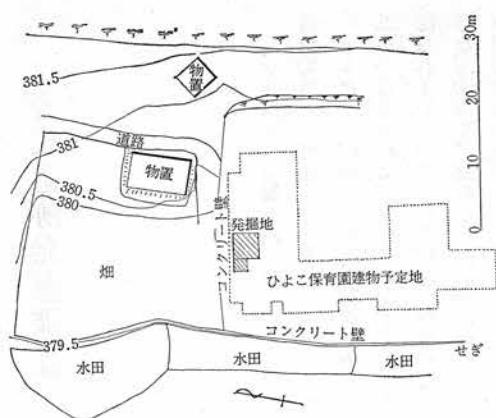
東は鴨ヶ岳（六六、三七）でさえぎられるが、こゝは高梨氏の大規
模な山城址として有名であり、山腹には平安時代末に成立した「今

昔物語」に載る如法寺(真言宗)の広大な寺域がある。扇状地面、

北西約五五〇mに高梨小館居館址があり、南西約二〇〇mには小田中東田遺跡があり、昭和四六年県営中野南部地区圃場整備事業施工中に遺構・遺物が発見され、弥生後期(箱清水式)から土師鬼高期、国分期の住居址が検出されている。

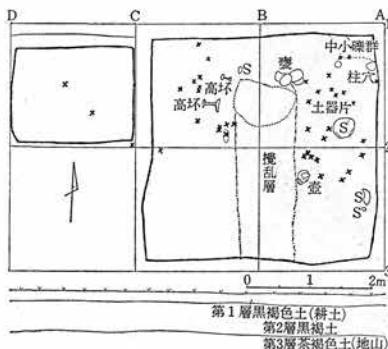
地質は安山岩の風化した黄色土が下層をなし上層は有機質の含んだ黒色土が、扇端部に接する地形上割に厚く堆積している。

遺構



第2図 グリット設定図

まず先に出土品のあつた地点より北側にグリットを設定し、発掘を開始した。有機質の含んだ土を除くと栗林式の土器片、櫛描文の土器片が出土した、あまり磨滅が進んでいないと観察され、ごく近くの傾斜面よりの流

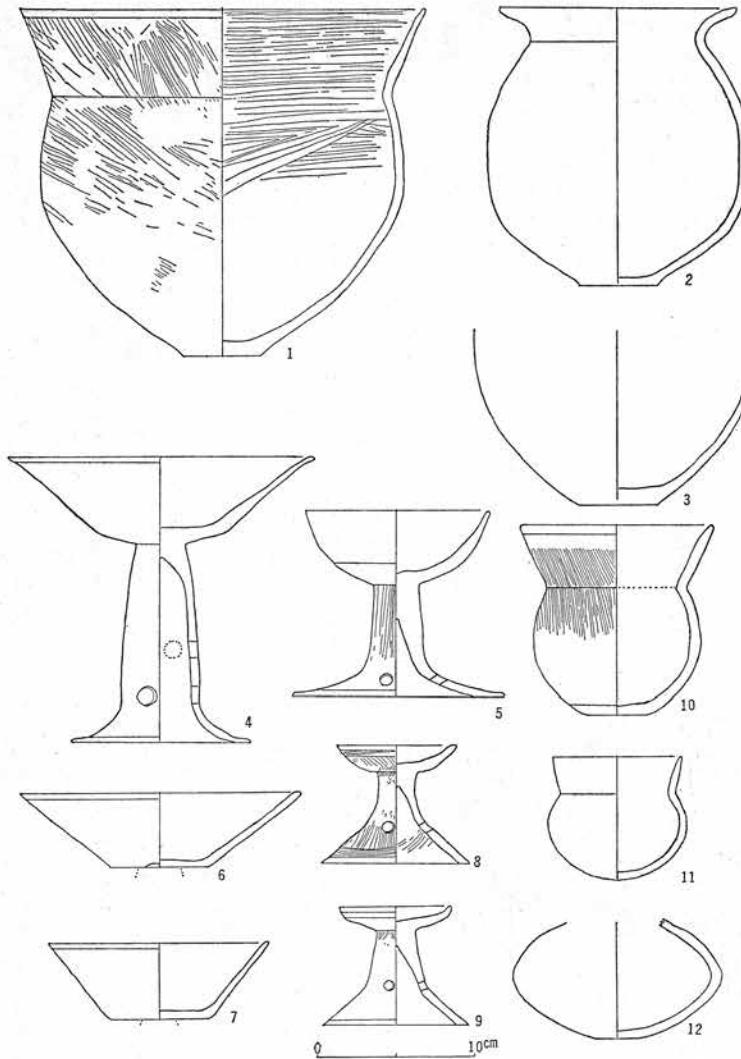


第3図 遺構測量図

出移動が考えられ、遺構の存在が予測される。
日程その他の制約から六ヶグリットの調査にとまつたが、敷地内の基礎の根掘りの状態を観察した結果、外に遺構・遺物の検出をみなかつた。A₁・A₂・B₁・B₂のグリットの中央部は巾一mに亘って地主荒井氏の經營された養鶏場の建物の基礎部分で擾乱されていたが、推定表土より五〇一六〇cm (調査時の深さ二〇一三〇cm) より、B₁グリットより甕破片、壠一、壺一、甕一、A₂グリットから甕一個体分などが孤をえがく様に配列されて検出された。遺物包含土層は基盤の黄色土層より二〇一三〇cm 浮き上った状態で検出され、前述の如き状態と重つて遺構面の検出は困難で柱穴一ヶ所検出されただけである。この外B₂・C₁グリットからは土器片が発見されたが、C₂グリットからは遺物が確認されなかつた。これに統べてC₃グリットからは立合いの時点で高坏一、壠一、器台一が検出された。遺物の年代から推して炉址の存在が予想され、住居址のプランなど不明な点が問題であるが、单一の住居址の一セ

ツトとして認定した
い。

遺物



第4図 遺物実測図

高坏（第4図4）脚部が柱状を呈する器形のあとなどが見られるが、表面は丁寧にヘラ磨きされている。脚部と坏部は別に製作され、ホゾにて接合の後、直径約六・五cmの円形の部分を作り出し、段を作つて坏部を大きく開かせている。脚部には一对の穿孔があり、焼成は良好である。

高坏（第4図5）前

者と違つて坏部より底部が大きく開き、坏部は椀状を呈し、中央に接合の時出来た押し凹みがある。

が、対になつてあけられている。ロクロ成形の後、ヘラ磨きされている。焼成は良好である。

壺（第4図2）胎土中に石英粒など多量に含み一見粗雑な感じをうける。輪づみロクロ整形の後、腹部はやゝ荒いササラ状工具で縦方向に荒く整形して、引き締めて止めた個所は器面が荒れている。また火熱をうけて黝んでおり、煮沸に使用されたとすると思形土器とすべきであろうか。

器台（第4図8）ロクロで整形され脚部のサ、ラ状工具面は右まわりに施されている。サ、ラ状工具は巾九mm程で浅い六筋程の櫛目紋様となって整形されている。脚部の立ち上り部分に等間隔に三個の穿孔があり、器面は赤褐色で堅く焼成されている。²

器台（第4図9）8とほとんど同形であるが受皿部が8に比べて浅い。

壺（第4図10）製作技法など器台と似ているが、胎土に砂粒の大きなものが含み粘土もあまり精選されていない。内外とも黝色を呈し、日常の雑器として使用されたと思われる。器高の約 $\frac{1}{3}$ の部分よりくびれ、口縁部は外反している。

壺（第4図11）立会調査中に出土した薄手を作られ赤褐色を呈しロクロ整形など製作技法に優れている。小形品に属する。

壺（第4図12）高壺（第4図6・7）は説明を省略する。

甕（第4図1）ロクロで整形後内外をヘラで良く磨いている比較

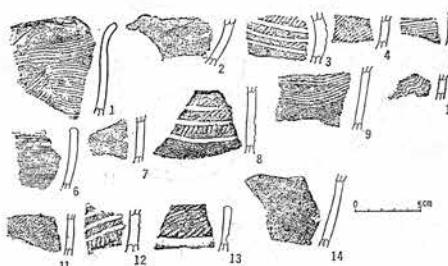
的薄手で赤褐色を呈し堅く焼成されている。

甕（第4図3）胴部以下の残存で全形は不明・一見粗雑な感じの出来で器面にムラがあり、サ、ラ状工具で簡単に整形されているだけである。

その他の遺物は拓本によって図示した（第5図）、1・5・7・9・10は櫛描文の系統で、1は流水文の手描で中部高地型で断絶痕がある。5は櫛描でコの字文様、7は格子目文、9は平行直線文類、10は平行曲折線文（波状文）である。2・3・4・6・8・12・13は栗林式土器の破片で、2は輪づみ技法で外面にこまかいハケ目を残す、3は壺の破片でLR繩文を籠でU形沈線に磨消してい

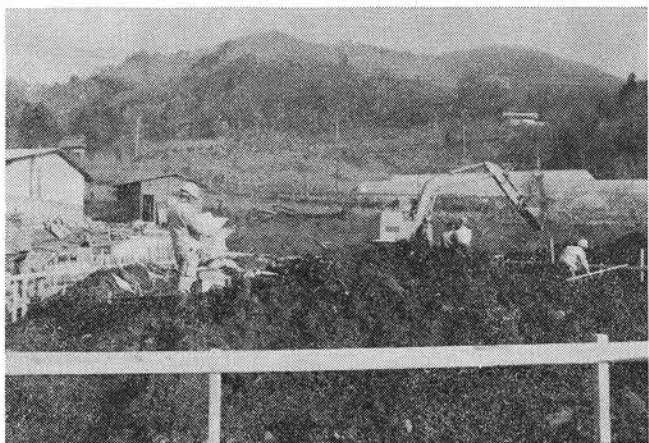
る。4は表面は櫛目ともハケ目ともつかぬ平行文で内面は黝い。6は壺の口縁部で口唇部にLR繩文が施こされている。8

・12は壺の破片で沈線文とLR繩文が組合される。13は壺の二重口縁部で口唇部までLR繩文を施す。11・14は土師器の破片であり、これを除いた破片は栗林式文化の土器に属し、これらは土師器のセッテ土器の上層より出土した事は先述の通りであ

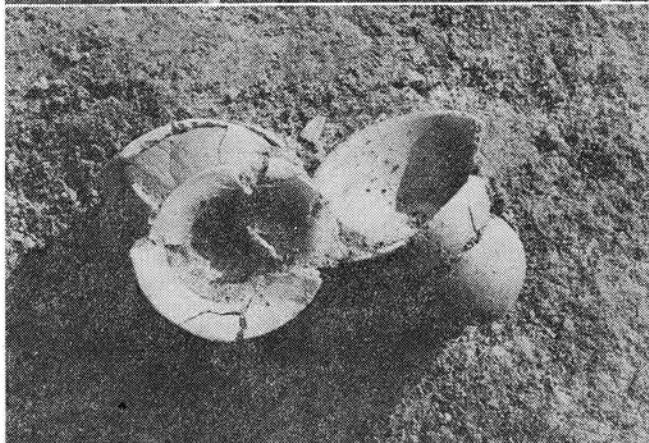


第5図 拓影図

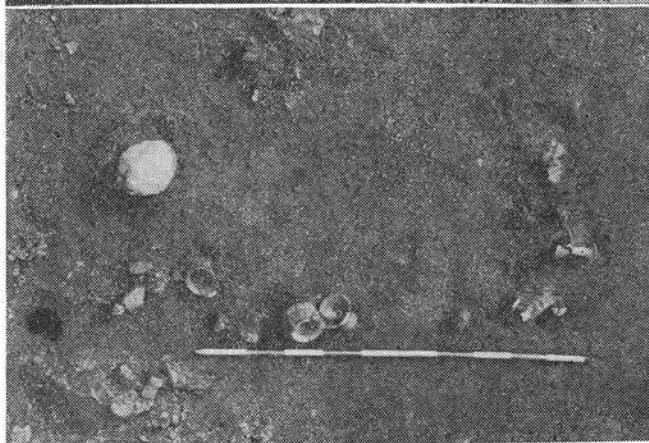
1 遺跡全景



2 壺・壇出土状態



3 遺構



る。
むすび
この普代遺跡の古式土師器と同時期の遺跡は中野市では安源寺・
島軒割などで、あまり多く確認されていない。この一因として住居
址が集中的に存在せず、一定の距離の保たれる拡散方式をとる為と

も考えられる。また器台の出現は箱清水式の末期からとされ、脚部
の比較的長い高坏は、群馬県の立田川式土師器³にも見られ、椀状の
高坏の伴出、脚部の穿孔は前代からの遺存が認められ、新井大ロフ
遺跡（和泉二期）²になると脚部の穿孔は消失している。台付甕、有
段口縁の壺など伴出しなかつたが、供獻形態、煮沸形態の土器が出

土し、住居址のセットとして把握されよう。この土師器の編年位置は、北信では桐原健氏の調査された柳町期に属し、笛沢浩氏は善光寺平第一様式を提唱し関東編年の五領期に对せされているが、この中半頃に位置づけるのが適當と考えられる。（櫛原長則）

2 これと同形の器台を飯田市恒川遺跡出土品で実見した。また飯山市須多ヶ峯からも出土している。高橋桂・大田文雄「北信濃須多ヶ峯第二次発掘調査報告」信濃¹一九一四昭五二

3 尾崎喜左雄外 石田川 昭四三

4 長野県史考古資料編、主要遺跡 昭五七
5 桐原健「北信濃長峰丘陵柳町遺跡調査概報」信濃¹九一四・五・十二・昭三一

6 笛沢浩 善光寺平における古墳時代以降の集落 遺跡の立地の基礎的研究 信濃¹一九一四

資料は中野市歴史民俗資料館に保管されている。

調査関係者 中野市教委 藤沢袈裟雄・岩戸啓一・小野昭男、
中野市文化財保護協力員 池田実男

註 1 金井汲次 中野市誌 古代の中野

